

【資料】

高木兼寛と森林太郎の医学研究のパラダイムについて

松 田 誠

東京慈恵会医科大学名誉教授

I. はじめに

学問の研究には国によって違う学風とでもいうべき一種の型があるといわれる。どう違うかは別として、とにかくドイツ風、フランス風、英国風などといったものがあり、その違いは特定の問題について文献を少しまとめて読んでみると分かる程度のものである。

研究を行う主体の最小単位は研究者個人であるから、この学風なるものはその国の個々の研究者の精神的内面の総合されたものといえるだろう。この精神的内面のことを現在はパラダイムということが多い（その外「考え方」とか「方法論」とか「ストラテジー」というような言葉もあるが、本小論ではもう少し大まかな概念にしたいので、敢えてパラダイムとした）。パラダイムとは、つまりそれまでの経験を総括したもので、科学観、人生観、世界観を主内容とするとはいうまでもない。もともと科学の通常の営みはパラダイムにそって行われるものであり、科学者なるものは何らかのパラダイムなしに意味のある観察や研究を行うことは出来ないのである。

筆者はここ何年か、ビタミンの発見史のなかで、脚気病の原因についての論争（脚気論争）に興味をもってきた。とくに栄養欠陥説を主張する高木兼寛（1849-1920）とこれに反対する森林太郎（鷗外、1862-1922）の間に展開された脚気論争は医学研究のあり方を学ぶ意味でも大変興味深く、いくつかの論文にまとめてきた¹⁾⁻⁵⁾。その際、筆者はなるべく彼らの講演や論文の内容についてのみ論及し、できるだけそのパラダイムには言及しないように努めてきた。客観的業績のみを問題にしたいと思ったからである。

しかし上に述べたように研究そのものがパラダイムの1つの表現であるとすれば、やはり二人の

パラダイムについて考えてみることも必要なことであろう。本小論はその1つの試みである。

II. 高木兼寛と森林太郎の脚気論争の概略

脚気の研究は、明治期医学の代表的性格を示すものであり、それは新旧思想が複雑に錯綜して進展した。富国強兵を国是とする明治政府にとっては、とくに軍隊における脚気罹患率の増大（全兵員の3-4割）は重大な関心事であった。そしてまず軍関係がその予防、治療対策をはからねばならなかった。

海軍軍医であった高木兼寛は、この病気の予防法なり治療法を発見するには、どこか西洋に留学して医学を学び直すしかないと考えた。幸い海軍病院のアンダーソン（William Anderson）の紹介もあって英国セント・トーマス病院医学校に留学することができた。そして明治13年11月、5年の留学を終えて帰国した高木は、さっそく海軍内に発生する脚気患者の原因究明に乗り出した。その際、英国で学んだ疫学的研究法が大いに役立った。

彼はまず脚気罹患率と環境要因との関係を調査して、罹患率は要因としての「衣」「住」「気候」には関係なく、「食」の質に関係があるということに気がついた。つまり脚気は蛋白質が少なく糖質が多すぎるときに起こり、それが適切であるとき（窒素炭素比が1/15に近いとき）には起きないということを発見した。彼はこの栄養欠陥説とも呼ぶべき学説を発表すると同時に、さっそくその予防、治療の実践に、兵食の改善に乗り出していった。

海軍病院の脚気患者10名をつかい改善食（洋食5名）と従来の病院食（米食5名）の比較予備試験（4週間）を行って予期した好成績を得たので、彼は明治17年2月2日から兵食の改善実行に踏み切った。そして翌3日には遠洋航海に出る筑波艦をつかって、この改善食のフィールド試験を開始

した。ちょうどその前年に出航し同年9月に帰投した龍驤艦が、航海中極めて多数の脚気患者の発生をみていたので、その同一航路を航行させて、改善食の効果を比較しようとしたのである。結果は表1に示すように、従来の蛋白質過少糖質過多の兵食(米食、窒素炭素比=1/27)で航海した龍驤艦では総員376名中脚気患者169名、死亡者25名を出したのに対して、バランスのとれた改善食(洋食、窒素炭素比=1/17)の筑波艦ではたった14名が脚気に罹ったのみであった。しかも14名中12名は洋食を嫌い、ミルク、肉類をまったくとらなかった者であった。もちろん死亡者は1人もいなかった⁶⁾。

また全兵員についての脚気統計では、表2に示すように、明治16年までの従来の兵食(米食、窒素炭素比=1/27)では常に30~40%が脚気に罹っていたのに、翌17年の改善食(洋食、窒素炭素比=1/20)にしてから罹患率は減少し始め、とくに翌々18年以降の改善食(麦食、窒素炭素比=1/17)にしてからは急激に絶滅にむかった⁶⁾⁷⁾。この表1, 表2は高木の脚気の研究のなかで最も重要なデータである。

高木の脚気の栄養欠陥説が提出されると、これ

表1. 龍驤艦、筑波艦の兵食と脚気発生の関係

	兵食	兵員数	脚気患者数	死亡者数
龍驤艦	米食	376	169	25
筑波艦	洋食	333	14*	0

*14人中12人は洋食のミルク、肉類を全く摂らなかった。

表2. 海軍兵食と脚気発生の年次変化

年次	兵食	兵員数	脚気患者数	死亡者数
明治11年	米食	4,528	1,485	32
明治12年	米食	5,031	1,978	57
明治13年	米食	4,956	1,725	27
明治14年	米食	4,641	1,163	30
明治15年	米食	4,769	1,929	51
明治16年	米食	5,346	1,236	49
明治17年	洋食	5,638	718	8
明治18年	麦食	6,918	41	0
明治19年	麦食	8,475	3	0
明治20年	麦食	9,016	0	0
明治21年	麦食	9,184	0	0

に反対する意見が次々と提出された。高木の最も激しい論敵であった陸軍軍医、森林太郎はその頃、軍陣衛生学とくに兵食問題を専攻するためドイツに留学していたが、その留守中も主要な学術雑誌は日本から送らせていたので、その批判、論争の様子はよく分かっていて、

反対意見の1つは緒方正規(東大衛生)の脚気伝染病説であった⁸⁾。脚気患者から原因菌である脚気菌を発見したとあって、高木の見解に真っ向から対立したのである。この脚気菌の発見は北里柴三郎に実験の不備が指摘され⁹⁾、自ずと消えてしまったが、森にたいしては脚気菌発見の希望をながく抱かせる結果になった。森が学んだ東大では、有名な外国人教師ベルツ(E. von Baelz)が伝染病説を講義し、森はそれを聴講して強い影響をうけていたからである。彼は(緒方を批判した)北里にたいして「君は識を重んぜんとする余り、果ては情を忘れてたり」¹⁰⁾と書いて激しく非難した。

森がドイツで書いた最初の論文は「日本兵食論大意」と「日本兵食論」である¹¹⁾¹²⁾。両論文とも論旨はほとんど同じであり、後者(独文)の副題に「Japanische Soldaten Kost vom Voit'schen Standpunkte(フォイトの立場より見たる日本兵食)とあるように、フォイト(Carl von Voit)の栄養素標準量を根拠にして高木の栄養説を批判したものであった。フォイトは云うまでもなく世界的に著名な栄養生理学者の1人であった。

森の結論は、「米を主としたる日本食はその調味よろしきをうるときは人体を養い心力および体力をして活発ならしむること豪も西洋食と異なることなし」[「わが陸軍においては米食で十分の栄養法を行うことができる」というものであった。フォイトの標準量からみて、高木が危惧する米食による蛋白不足糖質過多の心配はないというのである。「兵食論大意」には、また「米食と脚気の関係有無は余敢えて説かず」とことわって、栄養面からのみ論じようとする意図がみえるが、これは森が「高木の脚気栄養説」をまだ軽く見ており、いずれ覆るとふんでいたためではないかと思われる。

森が留守にする日本では、緒方に続いて大沢謙二(東大生理)が「麦飯の説」¹³⁾、「食物消化の試験」¹⁴⁾を発表して、高木の栄養説に強く反対した。「麦の蛋白は、なるほど米より多いが、しかし消化

吸収率は米の蛋白の方がはるかによいので、脚気予防のために麦飯を摂る必要はない」というのであった。

一方、ドイツでも高木と大沢の麦飯についての論争が話題になったことがあった。品川公使一行がミュンヘンに着いたとき、ミュンヘンに居た森は彼らを表敬訪問したが、そのとき公使は麦飯の利害について森に質問し、いま日本では参議などの高官はみな高木の説にならって麦飯を食べていると語った。それを聞いた森は「独逸日記」(明治19年9月27日)に「余大沢の論を是とし、高木の説を非とし、豪も譲るところなし」と書いている。品川公使によると、麦飯は一部の民間だけでなく上層階級にも広がっていて、現実には高木の説に傾いているというのである。森はさっそく独文論文 *Zur Nahrungsfrage in Japan* (日本の食物問題)¹⁵⁾ を書いてこれを批判した。彼はその中で、大沢の報告した前記論文の数値を引用して、麦飯は米飯に比して消化が悪く、たとえ蛋白含有量が多くてもその多くが糞便中に排泄されるから、麦が脚気に効くはずはなく、米飯を麦飯に代える必要はないと主張した。この小さい数頁の論文のなかに高木の名前が5回もでてくるが、これをみると、高木に対するライバル意識はかなり強くなっていったように思われる。

これらの批判に対して、高木は、さきの筑波艦出航とほぼ同時にはじめた犬を使った脚気発症の実験から、このように反論した。「米食犬の結果不良にして麦食犬の成績良好なるを見るとき、麦はたとえ消化吸収の度やや劣るといへども、身体の健康をたもつに米に優れること明らかなり」¹⁶⁾ と。つまり理屈はどうであれ、実際は麦食の方が米食より健康保全のために優れているのだと言うのである。

森は明治21年9月に帰国したが、そのころ生理学者、プフリューゲル (E. Pflueger) がフォイトに代わって新しい栄養素標準量を提案したことを知った。しかもこの新しい標準量はフォイトのしめす標準蛋白量よりかなり少なくて済むというのである。彼は帰国するやこの新しい標準蛋白量と日本食(米食)のそれを比較して、米食の蛋白は十分足りていると発表した。「非日本食論は將にその根拠を失わんとす」という論文¹⁷⁾ がそれであ

る。ここでの非日本食論とは高木が強調する脚気予防のために日本食を改むべしという論であることはいうまでもない。そして論文のなかには「然らばすなわち非日本食論者の最堅最牢たる城壁はすでにプフリューゲルらのために抜かれたり。また何の処に拠って強敵を防がんとするぞ。…わが同胞は何故にみだりにローストビーフに飽くことを知らざる英吉利流の偏屈学者の跡を踏み非日本食論を唱うるに至るや」という反高木の激しい言葉もみえる。ここに偏屈学者とは高木のことであることはいうまでもない。

高木はこの批判に直接反論することはしなかったが、同じ時期に小田原に突然発生した脚気の発生原因を究明することによって答えることになった。この小田原の脚気の発生原因は、経済変動ともなつて、小田原住民がそれまで食べていた小魚類を、商品として他の地区に売却してしまつて、ほとんど食べなくなったためであった。それは高木の持論である蛋白不足説を改めて証明するものであった。発表論文は「小田原の脚気病について」¹⁸⁾ である。

森は明治22年頃から今井武夫との間でいわゆる統計論争を始めるが、その中で無視できないのが「統計に就いての分疏」¹⁹⁾ である。この中で森は次のように言う。「医中の統計家(高木のこと一筆者)またいわく、『某国の某隊がある時期から米食を麦食に代えたところ、統計的に同時期から脚気患者が減少した。これは麦食の抗脚気作用によるもので、米食こそ脚気の原因である』と。しかしながら、これは単に脚気患者の減少時期と麦食への切り替え時期が偶然一致しただけのはなしである。もし正しい実験がしたいのなら、一つの兵団を二分して、一方には麦食を、もう一方には米食を与えて、両者を同一の地に住ませ、他の生活条件も同じにすべきである。そして、もし米食者のみが脚気に罹り、麦食者は罹らなかつたら、はじめて米食は脚気の原因であると言ひ得るであらう」と。

たしかに、森のいうことは、現実的にはきわめて困難であるが、理論的には正しい。兵団を二分して(あるいは龍驤艦と筑波艦を並べて)同時に栄養試験を行うべきであつたらう。高木もこの指摘については、米食をそのまま続け多くの脚気患

者を出している東京府民の脚気統計を対照にして反論した。森のこのような理想的な実験は、分かってはいても、それが可能な社会状況にはなかったのである。だから、兵食改善を断行するための予備試験では、彼は10名の脚気患者を二分して、一方には従来の病院食を、もう一方には改善食をあたえて経過を比較しているし(上述)、また前述の筑波艦出航と同時にはじめた動物実験でも、12頭の犬を二分して一方には蛋白の少ない餌を、他方には蛋白の多い餌をあたえて脚気の発症を比較している¹⁶⁾。可能な場合には実行しているのである。動物の飼育実験で、対照をおいて比較する実験はすでに明治5,6年ころから(西欧では)行われていた。

しかし考え方を変えれば、森が要求した実験はもうすでに始まっていたともいえるのである。例えば彼の要求を「一つの日本軍隊を二分して海軍と陸軍とし、海軍には麦食を、他方の陸軍には米食を与えて、両者を同一の地(日本ないし戦地)に住まわせ、もし米食の陸軍のみが脚気に罹り、麦食の海軍では脚気に罹らなければ、はじめて米食は脚気の原因であるといえるであろう」と解釈すれば、後でみるように現実にはほぼその通りになったのである。

明治18年(1885)、フォイトの弟子ルブネル(M. Rubner)は、自作の熱量計をつかって、体内で蛋白質、脂肪、糖質から発生する熱量をそれぞれ1g当たり4.1 kcal, 9.3 kcal, 4.1 kcalと算定した。この発表によって食物を熱量(カロリー)の面から評価する研究がさかんになった。森もこの面から(脚気の問題は一先ず脇において)、陸軍が推奨する米食のほうが高木の推奨する洋食や麦食より優れていることを証明できると考えた。「兵食検査成績略報」, 「兵食検査の成績中蛋白及び温量の多寡の事」¹⁹⁾²⁰⁾がその線に沿った論文であり、それは森が始めて行った(机上作でない)代表的研究でもあった。両論文を併せて普通「兵食試験」と略称することが多い。

その内容を説明すると、米食(米飯)、麦食(麦飯)、洋食(パン、肉)をそれぞれ6名ずつの兵卒被験者群に与え、8日間食べさせて、毎日の蛋白質、脂肪、糖質の摂取量と糞中、尿中へのそれらの排泄量を実測し、その両者の差から吸収された

表3. 米食、麦食、洋食と発生熱量

	栄養素	摂取量(g)	吸収量(g)	発生熱量(kcal)
米食	蛋白質	85.0	71.0	291.2
	脂肪	14.7	14.7	137.0
	糖質	533.7	525.0	2,152.5
	合計	633.4	610.7	2,580.7
麦食	蛋白質	78.1	55.5	227.4
	脂肪	12.6	12.6	117.1
	糖質	475.8	459.4	1,883.7
	合計	566.5	527.5	2,228.2
洋食	蛋白質	78.5	63.5	260.4
	脂肪	21.4	21.4	199.4
	糖質	441.5	426.8	1,749.9
	合計	541.4	511.8	2,209.7

蛋白質、脂肪、糖質の量を求めた。そしてその各吸収量から発生する熱量(カロリー)を上記ルブネルの4.1 kcal/蛋白g, 9.3 kcal/脂肪g, 4.1 kcal/糖質gに掛けて算出したのである。森のこの論文は実験値をそのまま並べた表が30頁にもなる膨大なものである。筆者がそれを1つの表(表3)にまとめてみた。被験者1人、1日の平均値で示してある。

この実験から森は「熱量の発生からみて米食がもっとも優れ、麦食これに次ぎ、洋食はもっとも劣る」という結論をだした(表3参照)。高木の成功にいらだっていた陸軍では、この結論を待っていたとばかりにとり入れ、さらに陸軍兵食の優秀性を保証する「絶対的根拠」として拡大利用していった。脚気との関係を不問にしたまま、陸軍兵食は最高なのだ、脚気の原因が米食である筈がない、という具合に増幅していった。そしてそのことが日清、日露両戦争で陸軍から膨大な数の脚気患者をだすことになるのである(前報⁴⁾)。

しかし実はこの「兵食試験」の実験には基本的な方法上の誤謬があったのである。それは食物の摂取量がまったく被験者の自由(嗜好)にまかされていたため、この研究結果は、当時の兵卒は米食をもっとも好み、麦食や洋食よりも多く食べた、その結果熱の発生量も米食がもっとも多くなった、ということを示すに過ぎなくなってしまったのである(栄養学的意味を失ったのである)。この

ことも同前報⁴⁾に詳述した通りである。

皮肉なことに、森がこの「兵食試験」を発表した同じ明治23年に、高木は宮中に参内し、陛下に麦食採用によって海軍から完全に脚気が根絶したことを奏上している。

昔から、ビタミン欠乏症の生化学的研究には、この種の「兵食試験」のような失敗例が多い。あるビタミン欠乏食で動物を飼育すると、多くの場合、食欲を無くしてやせ衰えていくのであるが、かつてはそのときに見られる生化学的変化をそのビタミン欠乏特有の変化と見做していたのである。しかしこの変化はむしろ、そのビタミン欠乏特有の変化というより、栄養不足ないし飢餓という一般的変化であることが殆どだったのである。そのため現在では pair feeding と称して、対照食群にも欠乏食群が摂ったと同じ量の飼料しか与えないようにして、そのビタミン欠乏特有の変化だけを取り出すように工夫している。

日清戦争(明治27,8年)では、麦食をまもった海軍からはまったく脚気患者を出さなかったのに、陸軍からは、戦地で米食を一層徹底したために、夥しい数の脚気患者をだした(4万余の患者と4千余の死者)。森は、高木の栄養説に符合する現実に不安を感じながらも、あえてそれを否定する論文を出した。「脚気減少は果たして麦を以て米に代えたるに因するか」²¹⁾である。

実は陸軍でもすでに各師団の現場では、森ら医務局中枢の意向に反して、明治18,9年ころから半ば公然と米麦混食を支給し、脚気は急激に減少していたのである。しかし森はそのことをこのように述べるのである。「この脚気減少は、各師団の米食から米麦混食への切り替え時期と妙に一致するので、あたかも米麦混食が原因で脚気減少がその結果であるような錯覚をおこすのである。しかしそれは論理上の誤りである(前後即因果にあらず)。実は蘭領インドでも日本陸軍と同じような脚気減衰の経時変化をみるのである。日本陸軍の米麦混食採用がどうして海を隔てた蘭領インドに波及するだろうか。脚気減少の原因は、麦食とは因果論的に関係なく、強いて言えば、非人為的、偶発的に(spontan)おこったということである」と。森はここで脚気を何か風土病のように考えているらしいが、しかしその原因を非人為的で偶発的で

あるとするなら、もう科学的な追究はできなくなってしまふのである。しかも現在からこれをみると、蘭領インドの脚気減少のパターンと日本陸軍のそれとは時期的に完全に違うし、また減少の原因も森の期待とは違ってやはり日本の陸海軍と同様栄養的なものであったのである。また蘭領インドの脚気減少が非人為的で偶発的であるとしたのはコールブリュッグ(J.H.F. Kohlbruegge)であり(1899)、森自身これにヒントを得たと言っている。

非常に理解しづらいところであるが、日清戦争の10年後の日露戦争でも陸軍はまたしても大量の脚気患者を出した(日清戦争をはるかに上回る25万余の脚気患者と2万8千の死者であった)。そしてその理由も前と同じく戦地で米食を徹底したためであった。陸軍医務局中枢の頑迷さにはあきれられるばかりである。

脚気の犠牲者のあまりに多いのに驚いた政府はその原因についての最終的な結論を急ぐべく臨時脚気病調査会を発足させた。そして当時の陸軍医務局長、森林太郎を委員長に任命した(明治41年)。

森はさっそく「脚気菌」をもとめて委員数名を蘭領インドの研究所に派遣した。それは当時来日していたコッホ(Robert Koch)の「蘭領インドに行つて原因菌を探すがよい」という示唆によるものであった。しかし当地の研究所にはもうかつての原因菌探しの雰囲気は消えており、そこではむしろ新しい抗脚気因子(のちのビタミンB1)の探索がはげしく進められていた。この蘭領インドへの研究者の派遣が森の脚気研究における最後の公的仕事になった。森は先の論文「脚気減少は果たして麦を以て米に代えたるに因するか」を出した後、仕事の舞台を医学の世界から大きく文学の世界に転換していた。

高木兼寛は、日露戦争勝利の翌年、母校セント・トーマス病院医学校で脚気撲滅の成功についての特別講演をおこなった²²⁾。そしてこの講演によって彼はビタミン研究の開拓者として高い評価を受けることになった。

III. 高木兼寛と森林太郎の研究パラダイム

上に見たように高木と森の論争の特徴は、高木

の栄養説の副次的問題にたいして森がやや一方的に論争を挑んでいる感じである。森の批判にたいして、高木は言葉で返すより、実験や調査によるデータで答えるかたちをとっている。また森が論文のなかにさかんに高木の名前を挙げて論駁の標的にしているのに対して、高木は森の名前を挙げたことがない。

森は、高木説の「麦食で脚気は予防、治療できる」という中心課題を外して、その説明にすぎない「麦は蛋白が多いから」というところに焦点を絞る。しかも「麦の蛋白は消化が悪いから脚気に効くはずはなからう」とか、「ドイツの栄養学者のいう蛋白の必要量はそんなに多くないから米食の蛋白で十分だろう」という具合に論点がぶれる。それでも高木（や陸軍現場）から、麦は脚気予防に有効だという統計が出ると、「そもそもその統計の出し方がおかしい」と反論する。脚気の統計がおかしくないことが分かると、今度は「脚気減少の本当の原因は食物など（人為的なもの）ではなく単なる偶発（Spontaneitaete）にすぎない」と主張する。論旨の変化の振幅が非常に大きいのである。

また学者の権威を後ろ盾にして論ずるのも森の特徴である。麦食の不消化の主張者、大沢謙二（東大での恩師）、蛋白の必要量を決めたフォイト、プフリーゲル、栄養の熱量を重視したルブネル、脚気減少を偶発にもとめたコールブリュッゲ、脚気菌探しをすすめたコッホと、次々とその意見に従い、それら権威を後ろ盾にする。

高木がもっぱら改善食による脚気の予防、治療に専念しているのに対して、批判する森のほうはその論点、視点を大きく移動するのである。この現象はどのような思想に由来するのか、項を改めてその高木の「研究の一徹性」と森の「論旨の易変性」について考えてみたい。

最近ある対談で²³⁾、吉村昭氏は脚気論争の高木について「森鷗外たちからは、ただ罵倒されるだけで終わっているのです。…高木兼寛は全く論じていない。沈黙しているのです。それは理論がないからでしょう」というようなことを言っておられる。

しかし理論をどのように理解するかにもよるが、筆者には、高木に理論がなかったのか、森らにはそれがあったのか、そう簡単には結論できないように思われる。脚気栄養説の最終段階であるビタミン学説にして

も、その「ビタミン B1 の多い食物を摂れば脚気は予防できる」という主張と、高木の「蛋白の多い食物を摂れば脚気にかからない」という主張と、どれだけ距離があるだろうか。健康食ではビタミン B1/糖質=1/500,000 と蛋白/糖質=1/4（窒素/炭素=1/15）という具合に、割合の数値に違いがあるだけではないだろうか（この相似的關係は B1 が蛋白に伴伴することが多いからであろう）。

たしかに生化学的には、ビタミン B1 は体内で補酵素 (B1 ピロリン酸エステル) になって、いくつかの酵素反応に関与していること、さらに B1 が欠乏するとこれら酵素反応がある程度滞ることは分かっている（酵素反応の種類によっては補酵素 B1 部分の電子論的機序まで明らかになっている）。しかし、ではこれら分子レベルの出来事がどうして脚気という病気をおこすのか、なぜ浮腫がおこるのか、なぜ神経麻痺になるのか、なぜ心肥大を伴う脚気心をおこすのか、といった最重要問題になると依然としてまったく未解決のままなのである。分子レベルの出来事は事細かに分かっている、そのことと欠乏症の発現機構（理論）との間にはまだまだ大きい乖離が残っているのである。

最近のビタミン学会誌の巻頭にも、岩井和夫氏（京大名誉教授）は、われわれビタミン研究者は、もっとビタミン欠乏症の発現機構といった基本問題に立ち返って、地道に研究すべきではないかという意見を述べておられる²⁴⁾。解析しやすい分子レベルの問題に走りすぎる若い研究者に警告があたえられたのである。

高木が一見沈黙しているように見えるのは、彼に理論がなかったからではなくて（理論がないという点では、彼の栄養説にしる、伝染病説にしる、その他の説にしる、当時のどれもみな同じレベルである）、むしろ批判者らが高木の発言の機会を封じ意見を聞こうとしなかったからではなからうか。晩年、高木のために設けられた講演会で彼はこのように述べているからである。「本日、多数の諸君に脚気のお話を申し上げることは私の甚だ喜ぶところであります。何故に喜ぶかと申しますと、今日まで高木の説を聞きたいという学者は一人もいなかったのであります。何時もただ反対の声のみでありました。それ故、高木ははじめ大変苦勞致しました。多くの学者はこのことをご存知なからうと思います。しかるに本日は諸君が私の説を聞いて下さるといふ、それを私は喜ぶと申し上げるのであります²⁵⁾」と。

1. 高木兼寛の研究の一徹性

先にのべたように、英国留学から帰国した高木は、さっそく脚気の疫学調査をおこない、原因として栄養の欠陥を想定した。そして予備試験として海軍病院の脚気患者に蛋白豊富な改善食をあた

えて好成績をえたので、こんどは筑波艦乗組員(333名)に改善食をあたえて航海させるという壮大な臨床試験を敢行した。そしてこれにも大成功をおさめたので、こんどは全海軍の兵食の改善を強行し、これによって全海軍の脚気を絶滅させてしまったのである。さらに筑波艦の臨床試験の際には、これに平行して犬にたいする改善食の脚気の予防実験(720日間)まで行っている。

海軍脚気の予防に成功してからは、こんどは国民の脚気予防、体位向上のための啓蒙活動をさかに行った。彼の慈恵病院の病院食はすべて麦飯に改善させ、また慈恵医学校の学生には必ず麦飯弁当を持参させ、同時に麦飯がいかに優れているかを講義した。晩年には地方に啓蒙講演に行くことが多くなったが、そこでも必ずと断言しているほど麦飯の優れた栄養効果を説いた(そのため彼の叙勲や授爵は麦飯勲二等、麦飯男爵などと評された)。その信念はまことに実用主義者らしく、「麦に勝る米はない。…麦を食すれば家族が病気になることがない。客人には麦飯は失礼だという人がいるが、私の宅では明治18年以来白いご飯を人に上げたことがない。…なるほど白い飯は外観は立派だが、人に与えれば害になると知っただけで、知らぬ振りをして上げることができない」²⁶⁾ というのであった。

このように高木の研究活動、啓蒙活動の中心に流れる思想は徹底した実用主義であった。どのように批判されても、有効な脚気の予防法、治療法

を発見し、これを実用しないことには、何もはじまらないという信念であった。この実用主義的信念はどこから身についたのであろうか、少し考えてみたい(実用主義とは功利効用をいっさいの価値基準にする考え方である)。

彼の実用主義的傾向は英国留学で得られた部分もあるが、それ以外の体験から得られたものも非常に大きい。体験の1つは、彼が医学修養なかばで軍医として戊辰戦争に参加したとき、自分の医術はまだ未熟で話にならないと痛感したことであった。ある野戦病院で彼の手術をみた大村藩の医者から「薩摩には医者はおらぬらしい」と大笑されたのである。このときのみじめな屈辱感は一生涯忘れることができなかつたと述懐している。医者は何よりも目の前の病人を的確に処置する優れた技術をもたねばならぬと痛感したのである。

もう1つの体験は、維新後、海軍病院で働いているときに遭遇した夥しい数の脚気患者のことであった。多くの若い兵士が苦しみながら死んでいくのをどうすることも出来ないのである。遠く農村、漁村から集まってきた若者を脚気病などで死なせてはならないとは思っても、如何にせん、まだ脚気にたいする治療法はなく、ただ対症療法を施して休ませておくしかないのである。彼は何としてもこの病気の原因を明らかにし、その治療法を確立せねばならないと考えた。そしてそのためには、何処か西欧に留学して近代医学を勉強し直すしかないという結論に達した。彼はその頃のことを「この外国で勉強し直したいという願望は一瞬も私の脳裏を離れたことはなかつた」²²⁾と述懐している。彼が英国に留学するについてはこのようなきわめて現実的、具体的な願望があったのである。

高木のこの2つの体験は、現在医学教育で行われている early exposure が医学生にきわめて有効であることを示すよい事例ではなからうか。

彼の徹底した実用主義は宗教の問題にまで及んでいる。晩年、彼は“神道禊の行”に全霊を投じていくが、ここでもこの宗教がどれほど身体によい影響を与えるかが彼の関心事であった(「生理的禊研究班」なるものをつくり、実験させている)。彼によると、禊の行は精神的にも肉体的にもきわめて有効であるということであった。



高木兼寛(1849-1920)像

しかしこの実用主義的傾向にはかえってマイナスになる面もあった。それは脚気栄養説をさらに発展させる意欲を失速させることであった。彼はこのように述べる、「脚気病を予防することはできるのでありますから、これ以上分かることがあれば、それに越したことはありませんが、病気が起こりさえしなければよいわけでありますから、吾人は何の必要があってさらにこれを研究するかという考えをもっているのであります」²⁵⁾と。たしかに実用主義的見地からすれば、脚気がよくなればもうそれでよいのであるから、さらに研究する必要はないかも知れない、しかし現実の世界の学界は、改善食の予防効果をさらに追究することによって遂にビタミンを発見するのである。ビタミンの発見がいかに多くの健康と幸福を人類にもたらしたかは、いまさら論ずるまでもないであろう。ここに高木の実用主義の限界があった。

2. 森林太郎の論旨の易変性

高木と森のあいだに展開された脚気論争は、高木が実際に脚気患者をまえにして研究を進めたのに対して、森は脚気に関する多くの論文を読んでこれを後ろ盾にして高木を批判するというかたちをとった。森は脚気患者を直接診ることなく、常に関連論文を読み、これを通して脚気を見ていたのである。

これはどうも森家の家風からきているように思われる。林太郎の祖父、白仙は「人と生まれて学問が無ければ朽木糞墻にも劣る」²⁷⁾という言葉を残している（当時、学問するとは書を読むことであり、文字の中に真理を見出すことであった）。その家風のもとで育った林太郎もこのように語っている。「私は少年の時から本が好きだと云われた。少年の読む雑誌もなければ、…お伽噺もない時代であったので、…百人一首やら、…浄瑠璃本やら、謡曲の筋書をした絵本やら、そんなものを有るに任せて見ていて、凧と云うものを揚げない、独楽と云うものを廻さない、隣家の子供との間に何らの心的接触も成り立たない。そこでいよいよ本を読み耽って、器に塵の付くように、色々の物の名が記憶に残る。そんな風で名を知って物を知らぬ羽目になった」²⁸⁾と。

また彼は5,6歳から藩校、養老館に入学したが、森家の年寄りはこの傾向をますます助長するよう

にはたらいだ。林太郎の長男、於兔の随想²⁹⁾によると、幼い林太郎は犬に吠えられるのが恐いのと近所の悪童達の悪さに怖気づいて学校に行こうとしない、そこで祖母と母がかわるがわる送って行き、また帰る時にも母に伴われて帰ったという。時には林太郎の友達の家を訪ね、「遊ぼう」と誘いをかけても、林太郎はいつも机の前に坐って読書か習字をしており、母がかたわらに付き添っているのでいつも逃げ帰ったという。これでは自然や友達に接して実体験の豊富な子供に育つはずはないであろう。要するに森家ぜんたいが、林太郎を立身出世させるために勉強ばかり仕向けていたのである。この点友達も多く、ガキ大将で通した高木とは大いに違うところであろう。森家の家訓は林太郎の心に強くインプレスされていたらしく、彼の息子たちにも常に「人間に生まれて学問をしないのは、生きている目的がないのも同然だ」と繰り返し教えたという³⁰⁾。

林太郎が東京に出たのは明治5年、10歳のときであった。蘭方医の父、静男が津和野藩主に従って東京に移り住むことになったためである。林太郎はさっそく予備校、進文学舎に入学してドイツ語を学びはじめた。わずか10歳の少年が、自分が希望する東大医学部（実際はその前身、大学東校）ではドイツ人教師がドイツ語で講義することを知っていたのである。そして明治7年、わずか12歳でその入学試験に合格した。同校の入学資格は14歳以上であったので、彼は生年を2年前に誤魔化して入学したという。恐るべき早熟の秀才である。彼に一番近いのが16歳であったというから、それでも4歳の開きがあったのである。

津和野のこの神童も、この東大でははじめ苦戦したらしいが、それでも努力の成果は次第に現れ、本科3年のときには席次は30人中2番になった（当時は予科2年、本科5年であった）。しかも彼の読書傾向は広く、小説、歴史、漢文、漢詩、和歌にまたがっていたという。医学の唯物的な側面を教わると、心の振子は大きく唯心的な文学へ振れるのであろう。林太郎にはこのような傾向がとくに強かったといわれる。

1) 権威依拠性

明治17年8月、森林太郎は陸軍からドイツに留学した。ベルリンに到着した森は、まずそこに滞

在していた陸軍病院長・軍医監、橋本綱常に面会した。そのとき橋本は改めて森に衛生学を専攻するよう指示し、ホフマン(ライプツヒヒ)、ペッテンコーフェル(ミュンヘン)、コッホ(ベルリン)の順に師事するよう勧めた。ホフマンには食物栄養学を学ぶためであり、それは出発に際して軍医監、石黒忠憲から与えられた「殊に兵食について研究すべし」という目的にも沿うものであった。石黒はどのような訳か以前から脚気の伝染病説を妄信していた。

森は得意なドイツ語で関係ある論文を次々と読んでいった(医学論文のみならず、時間のゆるす限り文学作品にも親しんだ)。そして著名な権威ある学者の論説に依拠しながら次々と論文を書いていった。以下簡単にその論文の内容を説明しながら、その依拠する権威者の履歴を紹介していきたい。

まず陸軍(とくに石黒軍医監)が期待する論文「日本兵食論」をまとめ、その大意(「日本兵食論大意」)を石黒に送った。留学して1年もたない間の論文であった。「日本兵食論」の副題に独文で *Japanische Soldaten Kost vom Voit'schen Standpunkte* とあるように、フォイト(Voit)の栄養素標準量からみて日本食(米食)の蛋白量は決して少なくない、洋食や麦食に代える必要はないというのが主旨であった(上述)。

フォイト(Carl von Voit. 1831-1908)はいうまでもなく世界的に著名な栄養生理学者の1人であり、森が留学していた頃はミュンヘン大学の生理学教授であった。リービッヒが化学の立場から栄養学を開拓した人であったのに対して、フォイトは生理学、代謝学の立場から栄養学の道を開いた人であった。ミュンヘン大学医学部を卒業後、同大学の医化学(のち衛生学)の教授、ペッテンコーフェル(Max von Pettenkofer)の助手となり、1863年生理学教授となり、死去するまでその職にあった。エネルギー代謝研究のため、ヒトを丸ごと入れてガス代謝を観察できる代謝室を製作し、栄養素の代謝を解析した。彼が栄養素の必要標準量を初めて世界に示したことはあまりにも有名である。

日本で高木と大沢謙二(東大生理学教授)の間に麦食についての論争があったことを聞くと、森

は断然大沢に味方して論文 *Zur Nahrungsfrage in Japan* を書いた(内容はだいたい大沢の主張のままであった(上述))。大沢謙二(1852-1927)は、森が東大の学生であった頃の生理学教授であり、ドイツ留学後、ドイツ人教師に代わって最初に教授になった人である。日本の生理学者はすべて彼の弟子か、孫弟子か、ひ孫弟子であるといわれる。

森が帰国するころ、フォイトに代わって今度はプフリューゲル(Eduard Friedrich Wilhelm Pflueger. 1829-1910)が新しい栄養素標準量を出した。そしてこの標準によると蛋白はフォイトのそれよりかなり少なくて済むという。森は早速この論旨に依拠して、論文「非日本食論は将にその根拠を失わんとす」を出版した(日本食で十分蛋白は足りているというのである)。そして高木ら「非日本食論者の最堅最牢たる城壁はすでにプフリューゲルらのために抜かれたり。また何の処に拠って強敵を防がんとするぞ」と豪語した(上述)。水戸黄門劇の“この紋どころが目に入らぬか”といった感じである。

プフリューゲルは言うまでもなくドイツの大生理学者である。デュ・ボア＝レーモン(Du Bois-Reymond EH)のもとで神経筋標本の電気緊張現象を研究し、1859年ボン大学教授になった。1868年には彼の名を冠した生理学雑誌 *Pflueger's Archiv fuer die gesamte Physiologie* を創刊している。

森は「日本兵食論」の中でもルブネル(Max Rubner. 1854-1932)を引用しているが、今度はあらためてルブネルの生体エネルギー論を利用して、米食が麦食や洋食よりも優れていることを証明しようと企てた。それが先の「兵食試験」である。その頃はルブネルが栄養素の生理的熱量を発表したのを契機に、世界各処で食物を熱量(カロリー)の面から追究する研究が盛んになっていた(森の「兵食試験」の評価については先のII.脚気論争の概略で述べた)。

ルブネルはフォイトの第一弟子であり、フォイト門下として栄養学を大きく発展させた人物である。フォイトの研究室で、正確な熱量計を作り、種々の食事を摂ったときの尿や糞の熱量を測定して、今日の代謝熱量の計算法の基礎を確立したのである。それによって彼は1885年マールブルグの



森林太郎 (1862-1922)
生誕100年記念メダル

衛生学教授になり、その研究室で蛋白質、脂肪、糖質の生理的熱量を実験的に各々1g当たり4.1, 9.3, 4.1 kcalと算出した(森はいち早くこの数値を使っている)。1891年コッホの後任としてベルリン大学に赴任し、1909年生理学教授となり、1924年70歳になるまでその職にあった。森の在独中はマールブルグ大学の教授であったはずである。

明治41年(1908)臨時脚気病調査会の委員長になった森は、こんどは細菌学の世界的権威であり、またかつての恩師でもあるコッホ(Robert Koch, 1843-1910)の意見に従った(上述)。コッホは脚気の伝染病説をとっていたのである。

さてここで森がその依拠する権威者をこのように次々と変え、それに従って自分の意見も次々と変えていった心状はどんなものだったのか少し考えてみたい。その参考になる言葉が、哲学的問題を扱った短編「妄想」³¹⁾のなかにある。「たとえば道を行くヒトの顔を辻に立って冷淡に見るように見たのである。冷淡には見ていたが、自分は度々帽を脱いだ。…帽は脱いだか、辻を離れてどの人かの跡に附いて行こうとは思わなかった。多くの師には逢ったが、一人の主には逢わなかったのである。自分は度々この脱帽によって誤解せられた。自然科学を修めて帰った当座、食物の議論が出たので、当時の権威者たる Voit の標準で駁撃した時も、ある先輩が『そんならフォイトを信仰しているか』と云うと、自分はそれに答えて、『必ずしもそうでは無い、しばらくフォイトの壘によって敵に当たるのだ』と云って、ひどく先輩に冷やかされた。自分は一時の権威者としてフォイトに脱

帽したに過ぎないのである」と。1人の権威者、フォイトに脱帽しても、フォイトに附いて行こうとは思わず、次の権威者にこころ変わりしてまた脱帽してしまうというのである。

どうしてだろうか。それは高木のように客観的に解かねばならない研究対象をもち、文献の中にのみ必要な(好ましい)意味内容を汲み取ろうとするからではないだろうか。客観的研究対象とは異なり、文献から文献への移動は比較的容易であり、森のような読書好きの研究者には陥りやすい傾向ではないだろうか。

森のなかで比較的持続した権威はやはりドイツ人ないしドイツ医学だったのではなかろうか。もし高木と同じ脚気栄養欠陥説をドイツ人の医学者が提案していたら、彼は案外素直にその学説を受け入れていたかも知れないと思うのである。

2) 相対主義

森が心変わりするのはなにも権威者に限ったわけではなく、彼自身が述べた論旨ですらすらに居心地が悪くなり、つぎの問題に移っていく。脚気論争においても先にみたように、脚気伝染病説、米蛋白十分の論、麦蛋白不消化の論、脚気統計の間違いの論、米食最優秀の論、脚気病因不在の論、再び脚気伝染病説へといった具合に変説して、一所に安住できないのである。このような傾向は一般には相対主義的傾向と云われるのであろう。相対主義とは科学や知識の客観性を否定し、科学は単にある“立場”からの主張に過ぎないというのである。森は自分の“立場”を変えながらその都度論旨を変えていったのであろうか。

このような移り気を代弁する言葉が小説「かのように」に出てくる(「かのように」は哲学的内容を理論的に提示した作品であるといわれる)。その中で森は主人公、秀磨にこう語らせている。「秀磨は平生ちょうどその時思っている事を、人に話してみたり、手紙で言ってみたりするが、それをその人に十分飲み込ませようともせず、人を自説に転じさせよう、服させようもしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分で自分の思想をはっきりさせてみて、そこに満足を感じず。そして自分の思想は、また新しい刺激を受けて、別な方面へ移って行く」³²⁾と。

森は、こういう自分の態度はファイヒンゲル

(Hans Vaihinger. 1852-1933) の「かのように」哲学 (Philosophie des Als-Ob) に影響をうけたと云っている。我々の住む現代は、ある特定の宗教や哲学が社会全体の価値体系になることはない、むしろ価値が多分化、相対化しているといつてよいだろう。このような時代には絶対的な価値はもちろん望めないし、しかも何らかの価値基準がなければ生きることもできない、それではどうしたらよいか。ファイヒンゲルは、その“都度”あたかも1つの価値が正しいかのように行動するしかないと教えるのである。それが「かのように」哲学である。その価値を信ずるのではないが、それが正しいかのように、それを信じているかのように行動するしかないというのである。小説「かのように」のなかで森は、この哲学は「不思議とぼくの立場そのままを説明してくれるようで、愉快でたまらない…」³¹⁾と語っている。高木が脚気の(客観的に価値のある)正しい予防法、治療法を求めたのにたいして、森はその“都度”正しい“かのように”論を張ったのであろうか。

森の相対主義的傾向にはもう1つの要因があったように思われる。それは厭世哲学的傾向である。ドイツ留学からの帰途、船のなかでこれからのことを思いめぐらすシーンがある。「帰って行く故郷には、自然科学の萌芽を育てる雰囲気が無い。…自分は宿命的な、鈍い、陰気な感じに襲われた。そしてこの陰気な闇を照破する光明のある哲学は、我行李の中には無かった。その中に有るのは、ショオペンハウエル、ハルトマン系の厭世哲学である。現象世界を有るよりは無い方が好いとしている哲学である。進化を認めないではない。しかしそれは無に醒覚せんがための進化である」³¹⁾というのである。

ショオペンハウエル (Schopenhauer)、ハルトマン (Hartmann) の名は森の小説や随筆のなかにしばしば出てくるが、よほど心酔していたらしい。恋愛小説「舞姫」にさえ「ショオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日こつ坐する」³²⁾という文章がある位である。ところでショオペンハウエルの中心思想は何といつても「宇宙の意志」にあるわけだが、それは無機的世界から有機的世界への生成運動の根源であり、それはまた人間内部の認識できない「盲目的意志」であるという。彼

は、人間はこの意志の衝動 (欲望) に動かされて苦難の生活が始まるのであり、この最悪な生を脱却するにはこの欲望を断滅して、インド宗教の涅槃の境に徹するしかない、と説くのである。またハルトマンは、ショオペンハウエルの「宇宙の意志」やその他の思想を統一して、彼もまたあらゆる実在の根源に、人間の意識を超えた意志と理性をもつ「無意識者」を想定するのである。

森はまた若くして老子や荘子に影響されたというから、この老子、荘子への傾斜もまた後年の「Resignation 諦観」やニヒリズム思想へと繋がるのであろう。老子、荘子は、相対的真理よりも全存在の根源 (絶対的真理) である「道」や「無」に復帰しようと説き、浅はかな分別を離れて与えられた立場に従って、その流れに従って生きようという「無為自然」の生き方を推奨するのである。

話が少し難しくなったが、要するに森はこれら (厭世的?) 哲学の影響のもとに、自らを「傍観者」と云い、「Resignation (諦観)」と云い、「先ず立場から決めて掛らないと、何も出来ない」と云って、自己を客体化し、冷たい合理主義者の様相で、与えられた立場で無理なく生きようとしたのではなかろうか。

3) 党派性

森が「げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我ならず」³³⁾ といった索漠たる心境で帰国したのは明治21年 (1888) であった。そして帰国後の第一声は次のように、土産話を期待した若い衛生部将校をがっかりさせるものであったといわれる。「今日海外見る所の事物に就いて演説すべきなれども、未だ敢えてせざる者は抑も故あり。凡そ欧州の規律殊に厳整なる軍隊にては、少年の将校等の陸軍内に関する言論は常に其趣旨を一上官に聞し、其裁可を得て、公衆に向かい之を演説するを得るなり。是を以て風紀みだれず。僕、心ひそかにこれを羨む。僕、敢えて〔本邦軍隊にても一般にこの如きを希望す〕と言わず。しかれども、自己一身に限りては、他日あるいは言わんと欲することあるも、必ずこれを一上官に質し後これを言わんと欲す。これ、倉卒の際敢えてみだりに口舌を弄するを欲せざる所以なり」³⁴⁾と。土産話をしないのは、〔若い将校の発言は前もって上官の了承をえなければならぬ。これが欧州の軍隊の規律

である] からであると言い、自分は、これからは陸軍という与えられた立場で生きるということを自分ならびに後輩に宣言したのである。

森はその2カ月後、自ら進んで「非日本食論は將にその根拠を失わんとす」と題して講演を行った。論旨は、プフリーゲルの意見を拠りどころに、日本食(米食)の蛋白は決して不足していない、十分足りている、米食は何ら西洋食に劣らないというものであった(既述)。米食を至上とし海軍の洋食採用、麦食採用を苦々しくみていた陸軍(医務局)中枢、とくに石黒軍医総監の意向に実に見事に符合する論旨であった。

続いてその翌年、森は、彼の最も大きい医学業績といわれる「兵食試験」を発表した。その成績は熱量の面からみて米食は最も優良で、洋食が最も不良、麦食がその中位という見事な結果であった。これまた陸軍中枢の意向を理想的に支持する成績であったため、この成績は長く陸軍兵食の優秀性を保証する絶対的根拠として利用されていった。そしてこのことが日清、日露両戦争における膨大な数の脚気患者を出すことになったのである(しかもこの兵食試験には実験方法として無視できない欠陥があったことは先述した通りである)。

森はこの戦争脚気の爆発的発生をみても、まだ論文「脚気減少は果たして麦を以て米に代えたるに因するか」²¹⁾を書いて、脚気の減少はなにも麦食とは関係ないと主張し続けた(既述)。しかし当時、麦食を摂る部隊ではどこでも脚気が激減していたことはすでに常識になっていたのである。医務局という圏の中では党派的考えに囚われて、普通の人にはよく見える事実や論理がもう見えなくなってしまったのだろうか。石黒軍医総監・医務局長を中心とする反栄養・反麦食の雰囲気かどっしり支配していたためだろうか。

陸軍ではその後もながく正式には兵食は米食に決まっていた。医務局中枢は、高木に対してはもちろん、陸軍軍医でも麦食派の緒方惟準、堀内利国、土岐頼徳、都築甚之助らに対しては、その発言をながく黙殺、弾圧し続けた。

この不条理な統制を見るとき、筆者はかつてのソ連で起こったルイセンコ事件を思い出す。

ルイセンコ事件というのはスターリン時代の農学

者ルイセンコ(Trofim Denisovich Lysenko. 1898-1976)が、ソ連政府の圧倒的なバックアップのもとに、定説になっていたメンデル・モルガン流の遺伝学をソ連から排除し、同流の遺伝学者(例えばヴァヴィロフら)を追放した事件である(1948)。その結果ソ連の農学、遺伝学は著しく遅れをとったのである。

ルイセンコは、染色体のなかの遺伝物質が遺伝を決定するということを否定し、遺伝はむしろ生物全体の特性であるとしたのである。そして獲得形質の遺伝はこれを認めたのである。彼の主張を支持するデータというのは、結局、たった一株の小麦の秋蒔き性が春蒔き性になったというだけであった(突然変異だったのか、種が混入したのかはいまでも不明である)。この奇妙な説が支持されたのは、この説が当時のソ連の支配的イデオロギーとうまく適合したからであった。

ルイセンコが登場した1920-30年代は、ちょうど米国のモルガン(Thomas Hunt Morgan)らが、遺伝子と染色体の関係を確立しつつあった時である。ルイセンコは、そのモルガンらの膨大なデータを実験的に否定することはせず、メンデル・モルガン主義は遺伝現象を遺伝子という物質に還元する機械論であると云って批判したのである。こうした機械論的生命観にたいする批判は、当時ソ連で主流だった唯物論的弁証法の考え方によく馴染み会ったのである。唯物論的弁証法では生物と環境のような対立要素はたえず相互作用しあって変化するというのに、メンデル・モルガン遺伝学では遺伝子は親から子へ変わることなく受け継がれると云い、変わる時は環境と関係なくランダムに変わると云って、あまり都合のよいものではなかったのである。

1956年4月、ルイセンコは農業科学アカデミー総裁を辞任した。つまりスターリン批判の一環として解任されたのである。優れた遺伝学者、ヴァヴィロフは同時に名誉を回復した(しかし彼はすでに死亡していた)。しかしこの事件のソ連遺伝学におよぼした影響はきわめて大きく、今でもこの国の分子遺伝学、分子生物学の遅れは目を覆うばかりである。

この事件が我々に教えることは実に意味深い。とくに痛感するのは「真実の追究という行為は、真実だけを審判に行わなければならない」ということであり、同じ意味で「結局、科学者には自分の得た真実しか味方になってくれるものはない」ということであった。

IV. 高木兼寛と森林太郎の宗教

高木は17歳のとき医学を学ぶために鹿児島に出たが、そのとき彼は自分でつくった「高木家祖神の霊」と書いた木札を持参している。しかもこの木札はその後英国へ渡るときにも、さらに72年の生涯を終わるまで守護神として離れたことはな

かったといわれる。もともと彼の家は「神道」であるが、同時に彼の体質のなかにすでに霊的なものにたいする畏敬の念があったことは確かであるらしい。

その後彼は、英国ではキリスト教に啓発され(留学の5年間教会に通った)、海軍引退後は仏教に接近し、晩年は神道(禊の行)に心酔していった。この変遷にはそれぞれ理由があり、キリスト教は慈善病院設立の精神的基盤であったし、仏教、禊は医学生教育のバックボーンにしようとしたのであったが、しかしそれは同時に彼自身の宗教的心境の深化の過程でもあった。

禊の行について彼はこのように述べている。「禊によって物の本質が見えてくる。これを心眼が開けるといふ。…基督の如きも此処に達したから宇宙の真理を知ることができた。この境地に入って始めて心身の調和統一、安心立命ができる。心身統一、信仰の極意に至れば宇宙と通じる、すなわち我と神とが通ずるといふ極点にたつする。ここに申したとおり神道でも儒道でも仏道でもそれは出来るのである、信仰が極点に至ればそれは出来る」³⁵⁾と。彼はこの段階で、宇宙のブラフマン(根源)と我のアートマン(本性)が一体となる境地に達することが出来たのである。高木はこの宗教が心身両面に有益であることを友人、知人はもちろん教職員や学生に、さらには一般人にも積極的にすすめていった。

晩年の彼の一日は、感謝から始まって感謝で終わったといわれる。毎朝、神棚のまえで祝詞を上げ、仏壇のまえで丁寧にお祈りし、さらに食事の前には、農夫のブロンズ像に麦飯を捧げ、感謝の合掌をしてから戴くという具合であったという。まさに神仏の慈悲にたいする感謝の生活だったのである。

森林太郎の場合は、自分の宗教について語ったものはほとんどない。しかし作品を通してその宗教観を知ることが出来る。ドイツ留学時もっとも影響を受けたのはプロテスタント神学者、ハルナック(Adolf von Harnack. 1851-1930)であったという(ハルナックはベルリン大学の教授、自由主義、歴史主義の立場でキリスト教の倫理・思想・教会史を研究。主著に「キリスト教の本質」〔教会史教本〕がある)。森は宗教の必要性をハル

ナックの業績を通してこのように述べている。「一体、宗教を信ずるには神学はいらない。ドイツでも、神学を修めるのは、牧師になるため、ちょっとと思うと、宗教界に籍を置かないものには神学は不用なように見える。しかし学問なぞをしない、智力の発展していない多数には不用なのであるが、学問をしたものには、それが有用になってくる。元来、学問をしたものには、宗教家の謂う「信仰」は無い。そういう人、すなわち教育があって、信仰のない人に、単に神を尊敬しろ、福音を尊敬しろと云っても、それは出来ない。そこで信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる。そういう人は危険思想家である。中には実際は危険思想家になっていながら、信仰のないのに信仰のある真似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めている真似をしている。実際この真似をしている人は随分多い。そこでドイツのプロテスタント神学のような、教義や寺院の歴史をしっかりと調べたものが出来ていると、教育のあるものは、志さえあれば、専門家の綺麗に洗い上げた、滓のこびり付いていない教義をも覗いて見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしないまでも、宗教の必要だけは認めるようになる。そこで穏健な思想家が出来る。ドイツにはこういう立脚地を有している人の数がなかなか多い」³²⁾と。

森のいう宗教は社会を平穩にするための宗教学であって、信仰そのものの問題ではなさそうである。しかし学問のない知力のたりない人間だけが信仰の世界に入るのだろうか。学問のある知性派の人間は自然や宇宙にたいして畏敬の念を抱くことはないのだろうか、神仏に帰依したい気持ちになることはないのだろうか。

森はさらに続けて、「どんな哲学者も、近世になっては大抵世界を相対に見て、絶対の存在しないことを認めてはいるが、それでも絶対があるかのように考えている。宗教でも、もう大ぶ古くシュライエルマッヘルは神を父であるかのように考えると云っている。…そうして見ると、人間の智識、学問はさておき、宗教でもなんでも、その根本を調べてみると、事実として証拠立てられないある物を建立している。すなわち かのよう が土台に横たわっているのだ」³²⁾という(シュライエルマッヘル Friedrich Ernst Daniel Schleier-

macher. 1768-1834. はドイツのプロテスタント神学者、哲学者、ベルリン大学教授)。森はここでも、神仏を在る「かのように」考えて、そのように振舞うしかないというのである。もしそうなら、もう神仏しか頼るものが無くなった人間はどうしたらよいのだろうか。宗教の存在理由を傍観的に説明されても、神仏を求めている人間には役に立たないのである。

V. あ と が き

高木の晩年にはいろいろ悲しいことがあったが、死そのものは静かであった(大正9年4月13日、尿毒症であった)。

森の場合も死そのものは静かであったが(大正11年7月9日、肺結核、萎縮腎)、それまでの暫くは公的な遺言状をのこすなど、やや劇しいものがあった。遺言状は次のようであった(一部のみ)。

「死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ如何ナル官憲威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得ズト信ス 余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍省皆縁故アレドモ生死ノ別ルル瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス…大正11年7月6日森林太郎言(拇印)」

この有名な遺言には昔からいろいろな論評がある。日清・日露の脚気の責任をとったとか、反権力の表現だとか、名誉欲を捨てて潔いとか、また中には爵位が欲しかったのだから受爵しなかった時のために残したのだといった穿った見方まで、いろいろである。

しかし筆者はすこし違った考えをもっている。筆者はこの遺言の底流になにか激しい怒りのようなものを感じるのである。死に臨んで何に対する怒りなのか。看病していた看護婦にたいしても怒りのようなお言を残している。「意識が不明になって、御危篤に陥る一寸前の夜のことでした。…突然、博士(森のこと一筆者)の大きな声に驚かされました。『馬鹿らしい! 馬鹿らしい!』そのお声は全く突然で、そして大きく太く高く、それが臨終の床にあるお方の声とは思われないほどの力のこもった、そして明晰なはっきりとしたお声でした…」³⁶⁾ というのである。これもまた臨終直前の怒りの表現だったのではなからうか。

筆者は、この森林太郎の怒りはそれまでの軍医としての生き方全体にかかわる怒りではなかったかと思うのである。それまで傍観者のな生き方、「かのように」的な生き方しかしてこなかった自分にたいしての怒り、そしてそのような生き方を誘導し、強要した自分の回りの者たちへの怒りではなかったか。もっと自分をさらけ出した生き方が出来なかったことに対する全霊をこめての怒りだったのではないかと思うのである。

森はかつてこのように書いたことがあった。

「生まれてから今日まで、自分は何をしているか。始終何者かにむち打たれ駆られているように学問ということにあくせくしている。…しかし自分のしている事は、役者が舞台へ出てある役を勤めているに過ぎないように感ぜられる。その勤めている役の背後に、別に何者かが存在していなくてはならないように感ぜられる。むち打たれ駆られてばかりいるために、その何物かが醒覚する暇がないように感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留学生というのが、皆その役である。赤く黒く塗られている顔をいつか洗って、ちょっと舞台から降りて、静かに自分というものを考えてみたい、背後の何物かの面目を覗いてみたいと思ひ思ひしながら、舞台監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め続けている。この役がすなわち生だとは考えられない。背後にある、ある何物かが真の生ではあるまいかと思われる。しかしそのある物は目を醒まそう醒まそうと思ひながら、またしてはうとうとして眠ってしまう」³⁷⁾ と。

脚気論争における、むち打つ舞台監督は陸軍医務局、なかでも石黒忠恵軍医総監だったのではないだろうか。その脚気論争においては、もっと高木の真正面で、蛋白や熱量のような副次的問題ではなく、脚気そのものの治療や予防の問題で戦うべきであった。医務局中枢、石黒軍医総監の喜びそうな方向へ、方向へと流されてしまい、その結果があの日清・日露の無残な脚気的大量発生になってしまった。本当は傍観者の立場、「かのように」の立場を打ち捨て、医務局中枢の流れを阻止すべきであったのだ。

一切を打ち切る重大事件である死に臨んで、あらゆる外形的なもの、とくに陸軍との関係を打ち

切って、本来の自分自身、石見の人・森林太郎になりきって死にたい。これがこの遺言状の真意だったのではないだろうか。

「かのように」ではない、確信的な生き方の存在を強烈に教えたのは明治天皇崩御に続く乃木希典大将の殉死であったといわれる³⁷⁾。

文 献

- 1) 松田 誠. 高木兼寛の医学. 東京: 慈恵医大; 1986. p. 148-52.
- 2) 松田 誠. 脚気論争にみる高木兼寛と森鷗外の医学思想. 慈恵医大誌 1991; 106: 387-96.
- 3) 松田 誠. 高木兼寛の東京都市計画案—鷗外の批判を中心に—. 慈恵医大誌 1995; 110: 847-58.
- 4) 松田 誠. 森鷗外からみた高木兼寛. 慈恵医大誌 2002; 117: 199-217.
- 5) 松田 誠. 脚気論争—日本最初の医学論争—. 日本内科学会雑誌 2002; 91: 125-8.
- 6) 高木兼寛. 脚気病予防説. 大日本私立衛生会雑誌 1885; 22: 1-20.
- 7) 高木兼寛. 脚気病の予防法は他病をも予防する力を有す. 大日本私立衛生会雑誌 1888; 62: 489-97.
- 8) 緒方正規. 脚気病菌発見. 大日本私立衛生会雑誌 1885; 23: 45-63.
- 9) 北里柴三郎. 緒方氏の脚気「パチルレン」説を読む. 中外医事新報 1889; 212: 57-9.
- 10) 森林太郎. 統計についての分疏. 東京医事新誌 1889; 584: 1-16.
- 11) 森林太郎. 日本兵食論大意. 医事新聞 1886; 192: 11-21.
- 12) 森林太郎. 日本兵食論. 東京医事新誌 1887; 463: 209-15, 464: 248-54, 465: 297-301, 467: 362-6.
- 13) 大沢謙二. 麦飯の説. 大日本私立衛生会雑誌 1885; 26: 1-13, 27: 1-17.
- 14) 大沢謙二, 上田計二. 食品消化の良否. 中外医事新報 1887; 172: 1-7, 173: 6-16, 174: 12-21, 175: 16-27, 176: 8-20, 177: 16-21, 178: 21-5, 179: 25-9, 180: 14-23, 181: 17-25, 182: 10-6.
- 15) 森林太郎. Zur Nahrungsfrage in Japan. 鷗外全集. 東京: 岩波書店; 1976. 28: p. 557-63.
- 16) 高木兼寛. 養犬試験の成績. 大日本私立衛生会雑誌 1886; 32: 14-6, 1888; 57: 108-22.
- 17) 森林太郎. 非日本食論は将にその根拠を失わんとす. 大日本私立衛生会雑誌 1889; 68: 20-37.
- 18) 高木兼寛. 小田原の脚気病について. 大日本私立衛生会雑誌 1889; 77: 807-24.
- 19) 森林太郎, 大井玄洞, 飯島信吉. 兵食検査成績略報. 東京医事新誌 1890; 639: 39-42.
- 20) 森林太郎, 大井玄洞, 飯島信吉. 兵食検査の成績中蛋白及温量多寡の事. 東京医事新誌 1891; 670: 6-12, 671: 11-4, 678: 10-3, 679: 14-7, 680: 15-8.
- 21) 森林太郎. 脚気減少は果たして麦を以て米に代えたるに因するか. 東京医事新誌 1901; 1221: 21-4.
- 22) Takaki K. Three lectures on the preservation of health amongst the personnel of the Japanese Navy and Army. Lancet 1906; 1369-74, 1451-5, 1520-3.
- 23) 望月正武, 吉村 昭. 対談・高木兼寛が残したもの. 葉の知識 2003; 54: 30-6.
- 24) 岩井和夫. ビタミン研究者への課題. ビタミン 2002; 76: 581.
- 25) 高木兼寛. 海軍衛生事業改良の経歴談. 成医会雑誌 1920; 453: 45-76.
- 26) 高木兼寛. 心身修養. 東京: 弘文堂書店; 1916. p. 113-4.
- 27) 森潤三郎, 鷗外森林太郎. 東京: 森北書房; 1942. p. 3.
- 28) 森 鷗外. サフラン. 千葉俊二 編. 鷗外随筆集. 東京: 岩波書店; 2000. p. 8-12.
- 29) 森 於菟. 父親としての森鷗外. 東京: 筑摩書房; 1993. p. 131-2.
- 30) 森 類. 鷗外の子供たち. 東京: 筑摩書房; 1995. p. 77.
- 31) 森 鷗外. 妄想. ちくま日本文学全集 森鷗外. 東京: 筑摩書房; 2000. p. 46-77.
- 32) 森 鷗外. かのように. ちくま日本文学全集 森鷗外. 東京: 筑摩書房; 2000. p. 105-53.
- 33) 森 鷗外. 舞姫. ちくま日本文学全集 森鷗外. 東京: 筑摩書房; 2000. p. 418-452.
- 34) 森 鷗外. 偕行社にて衛生将校に告ぐるの一節. 鷗外全集. 東京: 岩波書店; 1976. 28: p. 50.
- 35) 高木兼寛. 訓示. 成医会雑誌 1915; 40: 505-518.
- 36) 山崎一穎. 森鷗外 明治人の生き方. 東京: 筑摩書房; 2000. p. 223-4.
- 37) 小堀桂一郎. 森鷗外. 東京: 岩波書店; 1998. p. 332.